

三宅村の源為朝伝説にみる 英雄生存説の伝承傾向

池田 雄二

序

一 長根村廢村

二 伊ヶ谷村

(1) 通説

(2) 異説

(3) 分析

三 伊ヶ谷の為朝関連史跡

(1) 為朝山（為朝城山）、為朝屋敷跡、為朝神社

(2) 為朝の袂石

(3) 為朝の力水

小括

結

序

源為朝（1139年-1170年？）は六条判官源為義（1096-1156年）の8男である。『保元物語』によれば、1156年（保元元年）の保元の乱に破れ、落ち延びた先の近江で捕縛され、伊豆大島に流罪となった。その後、伊豆大島を南下し、伊豆諸島全域を支配した。1170年（嘉応2年）、院宣を受けた狩野茂光に攻められ、伊豆大島で自害したとされる（落ち延びて八丈小島で、再び官軍に攻められ、自害した等様々な異説がある）。

伊豆諸島全域を支配したとする為朝の伝承は伊豆諸島の多くの



島々に伝わる。その伊豆諸島は本州に近い順から、大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島と八丈小島、青ヶ島である。その位置関係は左図の通りである（「東京あいらんど」より）。

大島から神津島までは近距離で南北に連なっている。神津島と三宅島の間にはかなりの距離がある。三宅島から青ヶ島までは一直線

上に並んでいる。ただし御蔵島と八丈島の間には黒潮が流れている。つまり往来が容易ではない。こうした位置関係は為朝伝説の伝播状況と無関係ではないようだ。この事に関しては、前稿（後掲）で言及した。

神津島には為朝関連の伝説が明白には残っておらず、その空白地域を挟んだ三宅島以南からは現実離れした伝説が現れ、南下するに従ってそのような伝説が増えていく傾向にある。三宅島は為朝伝説の性質が変質してくる重要地域である。

三宅島には 2014 年に 2 回に渡って調査を行った。しかし一部の史跡については由来が全くわからない物が残っていた。

その後、2019 年 8 月、島嶼コミュニティ学会が三宅島で行われ、参加者の様々な知識や人脈が手伝って、伊ヶ谷村、およびそこに伝わる史跡に関して新しい発見があった。

以下では、為朝伝説が集中している伊ヶ谷地区にかつて存在した長根村（永根村とも書く。以下では長根村に統一する）についてその伝承を中心に紹介する。そして同村域にはどのような為朝関連史跡があるのかについて紹介する。以上の調査により、なぜ伊ヶ谷地区にだけ、為朝伝説が集中するのかについて検討する。この検討は生存伝説が残る悲運の英雄伝説の伝播法則を解明する事にとって重要である。その理由は、三宅島は、為朝伝説が一か所にだけ集中するだけではなく、為朝の子孫を名乗る者等の存在、祭祀、目立った信仰等が確認されないという点でも類似の史跡や伝承が残る他島と比較して特異だからである。他島と比較することで、その原因がみえてくるかもしれない。

一 長根村廃村

三宅島における為朝関連史跡としては為朝神社、為朝の袂石、為朝の力水、為朝の打抜岩¹が現存している。この内、島南部の坪田地区の磯にある為朝の打抜岩を除いて全て島西部の伊ヶ谷地区に存在する。そしてその所在位置は全て1431年（永享3年）まで同地区に所在していた長根村村域にある。この長根村は村百姓一同による塩運上の不正が発覚して村民が逃散して以来、廃村となった。この長根村について島ではどのように伝わっているか。

(1) 民間伝承

長根村廃村の原因について次のような民話が伝わっている。

当時の三宅島では米が獲れなかった。年貢は米の代わりに塩で納めていた。ある日、その塩が盗まれた。そうになると村人は連座にな

¹ 打ち抜き岩は為朝が数 km 離れた場所から、岩を打抜いた跡と伝わっており、かなり現実離れした伝説である。

り、処罰される。そこで村人総出で塩を探した。そのとき、島役人の1人が女兒の子守唄を聴いた。その歌詞は塩が彼女の家にある事を示していた。よく解らない子供が不用意にそのことを歌ってしまったのだ。

村では犯人を捕らえる準備をした。犯人は捕まる前に女兒を殺し、石臼ですり潰した。その後、犯人は捕まり、重罰を受けた。

犯人は処罰されたが、当時はそういう事件を生じさせただけで村人全員が処罰される法制度だった。そのため長根村は潰れた。

現在、長根村跡地に女兒を慰霊する地蔵が立っているという。

その後、逃散した長根村の一部の人々が伊ヶ谷村を創村したと伝わる²。

この民話は細部の信憑性はともかく、長根村が塩の年貢がある1村人の窃盗、すなわち不正が原因で廃村になった点で、一般的に語られる長根村廃村の原因と一致性がある。

二 伊ヶ谷村創村

伊ヶ谷村は三宅島伊ヶ谷地区に存在した長根村が廃村してから30年後の1471年（文明3年）に同地区に創村された。その創村の由来については諸説がある。

(1) 通説

一般的にはこう伝わっている。三宅島取締役神主壬生右兵衛³が長根村廃村を悲しみ、一村の開設を思い立った。そこで他の3村（伊豆村、阿古村、坪田村）に協力を求めた。しかし協力を得られなか

² 三宅教育研究会国語部会・三宅島の民話・後掲・「七つの子」。

³ 壬生氏は島北部にある椎取神社において現在でも続いている。

った。そのため神着村の地を縮小し、現在の伊豆地区と阿古地区の間に割り出して創村した⁴。

(2) 異説

島内郷土史家によると、通説に対して次の2点について疑問があるとする。

- ① なぜ創村に当たり、他村は協力しなかったのか？
- ② なぜ神着村一村だけが村域を割いたのか？

以上の理由について次のように説明する。神着村と他の三村との生活の違いに原因があった。他村は生活基盤が陸上にあった。神着村の本命は海にあり、海上輸送権を独占していた。農業もやっていたが、本命ではなかった。これによって全島を支配していた。

まずこういう生活様式の違いがあった。そうであるところ、神着村の港は北東風に弱い港だった。一方で伊ヶ谷にある港、大船渡港は良港だった。国地往来の廻船が同港に入港した場合、廃村前は長根村の協力があっただろう。しかし現状、長根村廃村により無人地帯である。これは神着村の生死に関わる。そう考えたとき、旧長根村の村域に新村を創設することは神着村にとって至上命題だった。そこで神着村はほとんど使用しない村の外れを捨てて、飛び石のつもりで伊ヶ谷村を創設した。

そして創村後、両村は海方村として輸送、交易、漁業権益を持ち、多くの利を上げ、島内一の富と権力を持った⁵。

要するに神着村は海方の村であり、新村創村に利害関心を持った

⁴ 島崎・三宅島百話 伊ヶ谷地区よもやま話・後掲・11頁。

⁵ 島崎・三宅島百話 伊ヶ谷地区よもやま話・後掲・11頁。

が、他村は山方の村だから、神着村程に新村設置に関心を持たず、協力しなかったということである。

(3) 分析

伊ヶ谷村創村の動機について通説と異説とでは異なる立場を採る。すなわち通説は創村の動機を長根村への憐憫の情に求める。一方で異説はその動機を利害関心に求める。ただし両説共に伊ヶ谷村設置は神着村単独で行われたことについては一致する。

ところで異説については多少の疑問が残る。神着村が海上権益を握り、それ故に全島を支配できたとすれば、他村も海上権益を持ちたかった筈である。伊豆大島では今の元村、岡田村等の海方の村と野増村、差木地村、泉津村との間にもそのような争いがあったと聞く（2011年8月24日に訪れた同島郷土資料館パネル解説等）。海方が儲かる、というのが離島に多く共通する現象のようだ。仮にそうであれば、他村は新村設立への協力と引き換えに海上権益に関与する機会を得ようとするのではないだろうか？そういった交渉がまとまらず、結局一村で新村設立したということはあるにない話ではないように思う。

何れにしても推測の域を出るものではない。異論がないのは、前述の通り、新村設置が神着村一村によるものであり、特に壬生氏の力が大きかったということである。

その壬生氏は為朝来島時に彼の饗応をしたとされており、為朝は旧長根村村域に滞在した。そして為朝関連史跡は同村域に集中している。このことは神着村、特に壬生氏と長根、伊ヶ谷村が無関係ではなかったことを示しているように思う。そこで以下では伊ヶ谷地区にある為朝関連史跡を紹介する。

三 伊ヶ谷の為朝関連史跡

旧長根村があった、島西部の現伊ヶ谷地区には為朝神社、為朝のたもと袂石、為朝の力水がある。これ以外の為朝関連史跡は島南部の坪田地区の磯に為朝の打抜き岩があるのみである。以下では伊ヶ谷にある為朝関連史跡を紹介する。

(1) 為朝山（為朝城山）、為朝屋敷跡、為朝神社

三宅島では1165年3月（永万元年）、為朝は狩野茂光に攻められた後に三宅島に渡ったと伝承されている⁶。上陸した為朝を島方取締役壬生右兵衛尉実一が饗応した。為朝一行は農漁業を行うのに困難な断崖である島西部、伊ヶ谷地区の城山（＝為朝山ないし為朝城山）に長根村を創村し、大屋敷を建てて3年間滞在した。その後八丈島に渡ったという⁷。この大屋敷跡が壬生氏の分家である長谷川家の屋敷地であり、長谷川家が代々、現在の為朝神社（下図）の神社守



をしていた⁸。為朝神社には為朝が戦いに備えた飛礮打石という丸石があり、力石と言われていた。今は昭和初期の開墾時に取り除かれて存在しない。

⁶ 為朝が大島で狩野茂光に攻められ、自害した年が1170年とされるから、『保元物語』に拠る限りは前後関係に矛盾が生じる。

⁷ BIRDER 編集部・10頁および三宅島・為朝の袂石由来、野口・1998年・後掲、近藤・八丈實記・二・後掲・133頁、高橋・園翁交語・後掲・34頁、浅沼・三宅島歴史年表・20頁。また八丈島の高橋與市「園翁交語」・30頁によると、三宅島に渡った為朝は幽かに遠島が見えたので、木を穿って舟を作り、自ら棹さして1日1夜で八丈島に到着したと伝わる。

⁸ 2020年4月3日及び11日の長谷川家子孫からの情報提供。

この神社を誰が何時頃祭主となって祭祀したかは判らない。口碑では次のように伝わる。伊豆大島に流された為朝は伊豆諸島征服の野望を持った。そして八丈島に渡る途中、三宅島に3年間滞留した。その場所は伊ヶ谷の大屋敷である。この地は西は海岸線、北は大げ野と呼ばれる畑地、その間に大沢がある。南は阿古であるが、間に沢がある。東だけが細い道で繋がる土地である。守るに便利な土地だった。自給自足としても広い畑地があった。こういった点に為朝は着眼した。

社殿はその後、長谷川佐治衛門家で建てた。恐らくは同家が廻船を経営したので、守護神としたものであろうと考えられている⁹。

(2) 為朝の袂石^{たもといし} (下図)



傍の由緒書き(後掲)によると、為朝が床几の梁にするために常に袂に入れて持ち歩いていたとされる石である。袂石の傍に500mlペットボトルが映っている。袂石は袂に入れるには余りに大きい。地元人でさえ腰

掛石と間違っ覚えて覚えることもある。これだけの巨石だと為朝本人の怪力が耐えられたとしても服が耐えられまい。

(3) 為朝の力水 (右図)

これも伊ヶ谷にある。周辺には何の標識もなく、案内もない。地元人もほとんど知らない。この史跡につ



⁹ 以上は、浅沼・三宅島歴史年表・後掲・20頁および笹本・伊ヶ谷風土記・後掲・8-9頁。

いての由来を郷土史家が次のように記している¹⁰。

為朝は永万元年（1165年）に三宅島に渡り、戦いの末に伊ヶ谷の城山に辿り着いた。そこを流れる清水を飲んで、体力が回復した。その以来、その清水を為朝の力水というようになった¹¹。

小括

以上の為朝関連史跡から判る三宅島における為朝のストーリーはこうである。

大島での為朝討伐から逃れた為朝は1165年（永万元年）に三宅島西部の長根村に上陸した。疲れ果てていた為朝は城山にある水を飲んで、体力を回復させた。

その後、北部の神着村に上陸した。同村には島方取締役壬生右兵衛尉実一が住んでおり、同氏の饗応を受けた。

その後、長根村に戻り、城山に大きな屋敷を構えた。そこには礮石があり、これは投げ石として使われた。投げ石が得意技であったという為朝の忠臣、八町礮紀平治等の家来も伴っていた¹²。

日常の同村では為朝が大石を袂に入れて出歩いている姿が見かけられた。

滞在は3年に及び、やがて八丈島に渡った。

四 三宅島における為朝伝説の受け入れ

旧長根村村域に残る為朝関連史跡から綴られる三宅島における為

¹⁰ 拙稿・伊豆大島配流後の源為朝の生涯と関連文化財等に関する中間的考察・後掲の時点では、由来が未詳であった。その後の調査で由来を記した文献に接することができた。

¹¹ 島崎・三宅島百話 伊ヶ谷地区よもやま話・後掲・27頁。

¹² 八丈島には、為朝の大蛇退治の際に落命した忠臣忠次郎を祭る忠次郎神社の伝説等が伝わる（本山・嶋と嶋人・175-178頁）。

朝に関する物語が以上の通りであるとして、こうした伝承をどのように分析できるか。

(1) 郷土史家による分析

ある三宅島の郷土史家は次のように分析する。

為朝伝説は伊ヶ谷地区に存在した長根村だけにある。他村には為朝伝説の痕跡が無い¹³。それゆえにこの村は異質の新村だったらしい。しかも生家と摩擦を起こしたり、圧迫を受けた様子は無い。この村は単なる流民ではなく、ここに住み着く事を目標とした力のある集団、武士集団が考えられる。

長根村廃村時、一部の村民は神着地区に住んだ。そこでは七軒百姓に次ぐ長根七軒百姓に取り立てるといふ破格の厚遇をされている。従ってそれだけの内容があった。以上からして為朝説は割合素直に受け入れられている¹⁴。

(2) 検討

この分析は伊ヶ谷地区の為朝関連史跡集中と同地区に存在した長根村創村の由来を関連づけている。そして創村したのは力のある集団、武士集団だとする。その集団と為朝関連史跡の集中とが関連するとすれば、為朝とその家来、あるいはその子孫等が長根村を創村し、その子孫が村民であった場合であろう。そうでないと、為朝関連史跡が同村域に集中する理由にならない。既に為朝神社の項で前述した通り、為朝が長根村を創村したという伝承がある。

確かに少なくともそのように考えられてきた可能性は高い。と言う訳は為朝が渡来したと伝わる伊豆諸島の多くの島々には為朝の子孫を主張する家が存在するからである。大島には藤井家¹⁵、新島には

¹³ 前述したように、坪田地区に為朝の打ち抜き岩という史跡もある。

¹⁴ 島崎・三宅島百話 伊ヶ谷地区よもやま話・後掲・10頁。

¹⁵ 樋口・伊豆諸島を知る事典・59頁。

土屋家（現在の青沼家）¹⁶そして八丈島の宗福寺住職の源家¹⁷である（八丈島については疑う見解も根強い¹⁸）。また琉球にも為朝の子、舜天王の伝説がある¹⁹。八丈島以外では為朝の現地妻の伝承も伝わる。八丈島の源家については同島のどこの家の娘の子孫か伝わらない。しかし為朝が同島で非常にもてた話は伝わる²⁰。

三宅島に3年間滞在したにも拘らず、同種の話が全く伝わっていないのも奇異である。長根村廃村が原因で伝承が失われた可能性がある²¹。

しかしそのような仮説が成立するためには、為朝の子孫が途絶える必要がある。ここで注目すべきは為朝神社と為朝の屋敷跡である。為朝が一定期間滞在した伝説が伝わり、為朝神社がある他の島々と比べると特異である。大島の為朝神社も新島の為朝神社も為朝が身を寄せた家の土地に建立され、かつ為朝はその家の娘を娶り、子を設けた伝承が伝わる。三宅島にだけそのような話が無いのは不自然である。

実は、長根村廃村については、現在の伊豆半島に当たる伊豆国金川地頭職奥山宗林による画策だったという伝承がある。奥山は1456年（康正2年）から1458年（長祿2年）の間に佐右衛門太郎という人物を八丈島代官として派遣し、伊豆諸島源為朝6世孫入道を討たせたという。その後、入道は金川の宗福寺を勧請して同寺（八丈島

¹⁶ 新島本村教育委員会・為朝神社（為朝神社境内内由緒書。池田・伊豆大島配流後の源為朝の生涯と関連文化財等に関する中間的考察に翻刻後掲した）、樋口・伊豆諸島を知る事典・102頁。

¹⁷ 野口・1998年・後掲。

¹⁸ 近藤・八丈實記・後掲・五巻・277頁。

¹⁹ 首里王府・中山世鑑・17、51頁。

²⁰ 本山・後掲・166-171頁における源石。為朝がモテすぎて男性の嫉妬を買った話が伝わる。

²¹ 野口・1998年・後掲によれば、かつては為朝神社に関する祭祀があったという。その内容に関する資料には現時点では接していない。

で住職が代々源姓を名乗る) を建て、僧となったという²²。

この事件が生じた 1456 年から 1458 年は、長根村廃村の 1431 年から伊ヶ谷村が創村された 1471 年の間である。佐衛門太郎は八丈島代官として赴任しているが、奥山の手先として三宅島長根村廃村に関わったとしたら、彼によって討たれたか逃散せざるを得ない状況に陥った等のために影響を受けた為朝子孫は八丈島だけでなく、三宅島長根村でもあったのではないか。この事に関して宗林が島の壬生氏と組み、為朝神を廃し、三島大明神により祭政を行ったという伝承が存在するという²³。

そうであれば、長根村村民と伊ヶ谷村村民にはほとんど連続性がなく、三宅島においては為朝子孫の伝承が現在まで伝わらなかったことの説明がつく。そしてこの伝承は、長根村廃村に関する民間伝承とも矛盾しない(塩盗人事件自体、何らかの陰謀の一環だったかもしれないからである)。伊ヶ谷村創村に関する諸説とも矛盾しない。

結

(1) 総括と仮説

まず以上を総括する。旧長根村、伊ヶ谷村(現伊ヶ谷地区)に相当する地域に為朝関連史跡が集中している。その理由としては、長根村創村者が為朝一党であった可能性が高いし、そういう伝承がある。同村廃村の原因については、一般的な説は同村の塩運上に関する不正だと伝わっている。一方で、この事件は三宅島の有力者である壬生氏と伊豆国金川地頭職奥山宗林の関与に因るとする伝承もある。仮にそうだとすれば、この時に八丈島の為朝六世孫同様、為朝子孫は討伐され、逃散してしまった可能性はある。そのため三宅島

²² 野口・1996年・後掲。

²³ 野口・1998年・後掲。

旧長根村村域に為朝関連史跡が集中するが、為朝子孫に関する伝承や祭祀が、大島、新島、八丈島、琉球と比較して三宅島において継承されないという特異な状況を生み出した、という仮説は成り立ちうる。

事実はどうであれ、為朝一党の子孫は存在しない。このことは次のように英雄伝説の伝播に影響するかもしれない。子孫等を名乗る住民がいない、あるいはいなくなると、伝説が消滅したり、伝説の内容が現実離れしがちになるのではないか。

(2) 他島との比較

この仮説について為朝の子孫に関する伝承が残る伊豆諸島や琉球といった他の島々の伝承と比較してみよう²⁴。

大島 為朝の子孫を名乗る藤井家がある。そして島には為朝関連の史跡も多く、元町の為朝祭り、岡田の八幡神社例大祭、元町為朝神社の屋根葺き替え神事（不定期）等の為朝に関する祭祀がある。

新島 為朝の子孫を名乗る青沼家（為朝の時代は土屋姓）がある。島には為朝関連の史跡もそれなりに多い。

八丈島 為朝の子孫であり、源姓を称する宗福寺住職が存在する。大賀郷に為朝神社がある。同神社の管理者への直接のヒアリング（2018年8月8日）によると、祭祀は行われている。それから、比較的最近建立された大賀郷の八丈神社においても為朝が祭られている。5月下旬頃、例大祭が行われている。ただし、当初の来島調査時の島民へのヒアリングでは祭祀の存在を確認できなかった。文献によって知る事は難しく、島民全体の認知は高くないようだ。

²⁴ 大島、新島については、池田・後掲と参考文献を参照されたい。

沖永良部島 来島した為朝は島の娘との子をもうけた。手々和村（現和泊町）の平山某と赤館某という者はその後裔だと伝わる²⁵。

喜界島 島の女は上陸した為朝にみな驚き、逃げ隠れた。1人の機織女が怯える様子を見せず、彼を喜び迎えた。為朝を御曹司ではないかと問い掛けて、契り、子孫をもうけた²⁶。ただし近現代において後裔を名乗る者に関する情報には接していない。

沖縄本島 琉球王国正史である『中山世鑑』によれば、今帰仁に上陸した為朝は沖縄本島の大里按司の娘（あるいは妹）を妻とし、生まれた子が尊敦であるとされる。尊敦は後に初代琉球王になったとされる（首里王府・中山世鑑・17、51頁）。舜天王統はその後、3代義本まで続いた。義本王は英祖に禅譲し、舜天王統は絶えた。

南山の下、大里村（現糸満市）の和解武（わとけな。南山の下、現沖縄水産高等学校西北）において為朝と大里按司の妹が住んでいたという伝承がある。大正時代においては、住民の為朝に対する尊崇の念が強く、米粟麦等が成熟する毎に初穂を「大和為朝公」と唱えてこれを供える風習が伝わっていた²⁷。比較的最近でも沖縄における為朝信仰は強く、為朝の沖縄渡来説は固く信じられている²⁸。これは事実といってよい。伊豆諸島や沖縄の為朝伝説について研究報告をした際も沖縄出身の参加者から為朝のことを親から聞いたことがある、という人があった。また大島の為朝神社について藤井氏（39代当主）から聞いたことであるが、沖縄から為朝の縁を辿って訪れる人があるという。八丈島大賀郷の為朝神社管理者の男性へのヒアリングでも、彼が管理者になる経緯を語るにおいて沖縄の為朝を祭

²⁵ 菊池・琉球と為朝・後掲・550頁。

²⁶ 菊池・琉球と為朝・後掲・550頁。

²⁷ 菊池・琉球と為朝・後掲・548頁。558-570頁。

²⁸ 沖縄朝日新聞社・沖縄大観・後掲・259頁。

る巫女達と思われるが、そういう者達との不可思議な縁についてきかされた。

しかしながら現時点において、沖縄本島で為朝や舜天王統の子孫をなめる者に関する資料等には接していない。ただし奄美や沖縄に関する調査は実地調査の回数も少なく、未だ十分とはいえない。今後、新たな情報に接する可能性はありうる。

なお為朝神社等の類は存在しないとされる²⁹。

これらの島々において、奄美諸島は調査不十分であるため何ともいえないが、為朝に関する子孫や為朝を故国の祖と信じる住民が存在するこれらの島々においては為朝伝説が書物等によく残され、祭祀等の存在等信仰も厚い。そして余りに現実離れしている伝説に接する事もほとんどない。これはなぜだろうか。

特に直系子孫を名乗る者にとっては、英雄為朝の子孫であることを強調したいであろうから、伝説を残す動機が存在する。特に大島、新島、八丈島は為朝と島の旧支配階層が結びついている。島の統治上も都合が良い筈である。沖縄についても、琉球王国を為朝ないしその子が開いたのだとすれば、琉球国と日本国とは天皇という共通の祖（為朝は清和天皇の8世孫）をもつことになるから、日本にとっても琉球にとっても統治上、都合がよい。

伊豆諸島も沖縄も、為朝伝説の保存については支配者層の統治上の動機が強く働いていると考えられる。英雄伝説というものは、支配者層等にとって何等か都合の良い場合にこれを残し、伝える動機が強く働く傾向があるといえる。また反対に他の有力者からは、こ

²⁹ 菊池・琉球と爲朝・後掲・548頁。これについては、琉球国が清と薩摩藩の二重支配を受けていたことが関係すると考えられる。琉球国は察度王（在 1350-1395年）から明への朝貢を開始した。そして尚寧王（在 1589-1620年）から薩摩藩の支配を受けるようになった。これ以後明治まで琉球国は中国王朝から中山王に封ぜられる必要上、日本に関する事績を物理的に抹消することに努めたという（同・540-542頁）。

うした者達は自分たちが支配しようとする場合には不都合であるから、三宅島や八丈島のように為朝子孫を名乗る者達が討伐されたりもするのであろう。

伝説の内容が現実離れする事と子孫等が存在しない事との関連についてはどのようなことがいえるか。これについては現時点では何ともいえない。為朝の子孫の伝説が残り、かつ伝説が現実離れする傾向が強いのは八丈島である。そうした伝説の程度、数は八丈島の方が三宅島よりも明らかに顕著である。三宅島のこうした伝説は為朝の袂石と為朝の打抜き岩だけである。八丈島では、10以上に上る。極端なものを2例ほど取り出そう。

まず大賀郷と檜立の境にある峠にある堀切(ほっきり)に関する伝説である。為朝が八丈島にいた当時、大賀郷から檜立へ通じる道が無かった。そこで「為朝様」が腰掛石から大弓で矢を射て、この山を射通した。そこに道が出来、大賀郷と檜立とが通じた。矢で掘り抜いたところを堀切という。そこは切通しになっており、両側の地層の筋を矢羽の跡だと伝えている(本山・後掲・171-172頁)。その矢が落ちたところはメイルクドの堤池といい、水が湧いて池になったという(本山・後掲・173-174頁)。

為朝の足跡の伝説はこうである。本土より八百余の船が攻め寄せた際、為朝は五人張りに25束の矢で大船を射破った。小舟は扇子で扇いで沈めたという。このとき、乗船していた島別当が為朝を攻めに来たのではないと弁解したのでこれを赦した。戦の際、為朝が弓を射るために力を入れた足跡が為朝の足跡である(本山・後掲・175-178)。

三宅島には為朝の子孫等を名乗る者が存在せず、かつ現実離れした伝説が残る。しかし八丈島には為朝の子孫を名乗る者が存在し、かつ現実離れした伝説が多く残る。さらに為朝の子孫がいた形跡はないが、両島の間にある御蔵島にも八郎畑という現実離れした伝説が残る。これは為朝が三宅島から射た矢が約20km南の御蔵島に落

下したという伝説である（東京都教育庁大島出張所・後掲・23頁）。

為朝の子孫の存在の有無に関わらず、現実離れした伝説が存在している。子孫の有無と生存説が残る英雄の伝説が現実離れする現象とは関係性がないように思える。三宅島、御蔵島、八丈島と南下するに従って、伝説が現実離れする傾向がみられ、寧ろ大島を始点にした場合の距離が作用しているようである。三島の内現在まで為朝子孫等を名乗る者が存在する島において現実離れした伝説が残る島は八丈島だけである。つまり現時点の調査段階では唯一の例外である。従って今後の課題として、八丈島における為朝子孫に関する伝承を調査検討する必要がある。

【参考文献】

浅沼悦太郎『改訂増補 三宅島歴史年表 附 伊豆諸島』4版（浮田道照、1981年）。

池田雄二「伊豆大島配流後の源為朝の生涯と関連文化財等に関する中間的考察 — 大島から御蔵島まで」島嶼コミュニティ研究5号（2018年）20頁以下。

大島観光協会『伊豆大島 地域資源情報《詳細》』（大島観光協会、2015年）。

沖縄朝日新聞社『沖縄大観』（日本通信社、1953年）。

菊池清「琉球と為朝（琉球寄稿断片）」『幽芳全集 第十三卷』（国民図書株式会社、1922年）529頁以下。

近藤富蔵『八丈實記』全七巻（緑地社、1964-1976年）。

笹本亀治『伊ヶ谷風土記』（長谷川鴻、1976年）。

島崎広光『図説三宅島百話 伊ヶ谷地区よもやま話 伊ヶ谷周辺の歴史散策』（私製、2014年）。

首里王府編『訳注 中山世鑑』諸見友重訳（榕樹書林、2011年、初出1650年）。

高橋與市「園翁交語」八丈島の古文書を読む会『八丈島の古文書集

第一集』(南海タイムズ、2012年、初出1886年)15頁以下。
東京都教育庁大島出張所『島の史跡 続大島編』(東京都教育庁大島出張所、1988年)。
野口啓吉「うれしきに何を得させん 西の海」南海タイムズ1996年1月1日。
野口啓吉「はんやな 八丈島に住む殿は…」南海タイムズ1998年1月1日。
樋口修司『伊豆諸島を知る事典』(東京堂出版、2010年)。
三宅教育研究会国語部会『三宅島の民話』(三宅教育研究会国語部会、1986年)。
本山桂川『嶋と嶋人』(八弘書店、1942年)175-178頁。
BIRDER 編集部『BIRDER SPECIAL エコツアーリズムで三宅島復興！三宅島の自然ガイド』(文一総合出版、2007年)。

[三宅村「為朝の袂石由来」(制作年不明、2014年8月20日撮影)。
為朝の袂石横立札の翻刻]

たもといし

為朝の袂石由来

鎮西八郎為朝は源氏の宗家、鎮守府将軍八幡太郎義家の嫡孫、六条判官源為義の八男である。

保元元年(一一五六年) 官廷における新院と本院との争い(保元の乱)にあたって為朝は父為義に従って新院方に組したが破れ、父為義は斬られ為朝は伊豆大島に流罪を科せられた(一八歳)。

野に放された自然児は若年ながらこの島で頭角を現し、近隣の島々をその膝下に抑え島の頭目と評された。伊豆の領主狩野大介茂光は為朝の振舞に我慢がならず、これを攻めたが一国領主と流人の力くらべは論ずるまでもない。為朝は郎党を連れて三宅島に難を逃れた。永萬元乙酉年三月(二七歳)であり、大島に送られて九年目

のことである。(三宅島古記録に島方取締役二四代壬生右兵衛尉実一、為朝を迎える饗応し、為朝はやがて八丈島に渡ったとある)

為朝は伊ヶ谷地内の城山に館を築き八丁礫の喜平次等郎党と共に住んだ(以来この城山地区が大屋敷と呼ばれるに至った)

源為朝は豪勇無双で強弓を引いたことは夙に知られるが、この袂石は床几の梁にするため、常に袂に入れて持ち歩いたところから袂石の名がつけられた。中央にくぼみがあって座り心地がよく少し雨が降った場合でも、水が溜まらないように横に細い溝がついている。

乱世に生きた薄幸の英雄が三宅島に残した唯一の遺品である。

三 宅 島